
200文字小説集

藤夜 要

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

200文字小説集

【コード】

N4496K

【作者名】

藤夜 要

【あらすじ】

ジャスト200文字の連作。「ジャスト200文字の小説たち」
<http://200moji.seesaa.net/>を応援しております。

特効薬（前書き）

2008/11/17 執筆

特效薬

彼と別れてもう半年。未だ私は振り切れず、彼の替わりを求め夜の街を漂っていた。どんなに肌を重ねても彼の様なぬくもりを得られなかった。

そんな私を見兼ねたのか、ある日あの子に怒鳴られた。アルコールと失恋に溺れる私の手首を掴み、行きずりの男から私を引き剥がした。

「いい加減にしろ！」

その声は震えていて。掴まれた手首は、彼と比較するの忘れる程熱く。

失恋の特效薬は新しい恋。ふとそんな言葉が脳裏に過ぎった。

運命の出逢い（前書き）

2010/03/18 執筆

運命の出逢い

多分この辺りだったはず。

コンタクトを落としてしまった私は、落としたそれを涙目で探していた。

ド近眼だから、レンズの所為で目が小さく見える。だから眼鏡は嫌いな。

小さな見えない光り物を半べそで探していると。

「これ？」

不意に頭上から声が降った。不細工な眼鏡仕様の面を上げると、探していたのはちよつと違う、別の光るモノを私は見つけた。

それは、運命的な出逢い。そう思ったと話したら、彼はくすりと小さく笑った。

巡る想い(前書き)

2010/03/19 執筆

巡る想い

息子が隠していた「夢」という題の作文を盗み見た。自分と同じ夢を抱いていたことに、俺は思わず苦笑した。

努力が足りなかったとは思わないが、俺はその夢を結果的に諦めた。両親への罪悪感が高じ、逆に辛辣な態度をしてしまった日々が懐かしい。

今、少しだけ両親の気持ち解った気がする。両親はきっと結果など度外視で、ただ応援したいだけだったのだ。

作文をそつと戻して心に誓う。明日は老いた両親に声の便りを届けよう、と。

子ども卒業（前書き）

2010/03/20 執筆

子ども卒業

卒業の日が別れの日。そう覚悟を決めていた。

そんな物思いに耽っていると、ドアホンの音に続き、特定の人にあげる「まあ」という母の声。慌てて階段を駆け下りる。彼へのお祝いを手に携えて。

「卒業出来たし、十八を迎えたし。だから今日プレゼントをもらいに来た」

子供みたいな顔をしてそう言った癖に。

気づけば私の指には硝子の指輪。

「いつか本物を贈るから」

諦めていた繋がりには、彼の言葉と包容によって、私の中に復元された。

ひがん(前書き)

2010/03/22 執筆

ひがん

墓前に貴女の好きな花を供えて手を合わせる。同じ香りを漂わせていた貴女と今を語る。

「繁久がもう中学へ入学だ。貴女にも見せたかったよ。繁久の真新しい制服姿」

風が春のぬくもりを運んで来る。貴女に包まれているようで、私は一瞬だけあの頃に戻ってしまった。

「まだ迎えには来てくれないのかい」

風が、止んだ。まだ迎えは無理らしい。孫の成人までと言いたいのだろうか。

今日は彼岸。私の悲願はまだ当面かなえられそうにない。

最強の矛盾（前書き）

2010/03/23 執筆

最強の矛盾

お前は儂き御方の為、彼女の矛になると俺に宣言した。ならば俺は御方の為、最強の盾になるとお前に誓った。聡明たる御方の為、常に最強のふたりであろうとあの夜に誓った。

それから幾歳月が過ぎただろう。

いつしかお前は最強を驕り、俺は己の過信に溺れていた。気づけば愛しい御方の袖を苦悩の涙で湿らせている。

友よ、あの頃に戻ろう。御方を本当に想うのならば、その矛を収めよ。

友の遺したその言葉が、後になって俺を泣かせた。

待てない(前書き)

2010/03/25 執筆

待てない

貴方に全身を包まれて、私の中が熱を帯びて膨らんでいく。

「そろそろいいかな」

まだ、ダメ。まだ、もっと熱くなるはず。

「長いな」

イヤ、痛い。そんなに強く擦らないで。

あなたは私の声も聞かず、すごい勢いで擦り上げた。火照る体が限界を越える。彼の焦りが私を弾けさせた。

「うわ」

だから言ったのに。そんなに乱暴に擦らないで、って。

「母さん、割れちゃった」

「やっぱり電子体温計で計ればよかったわ」

母が今更な事を呟いた。

性(さが)(前書き)

2010/03/28 執筆

性（さが）

理解し合えるはずなどないのに、他者の理解を求めてしまう。人とはそんな哀しい生き物だ。ないものねだりの哀しい性。心を欲し、理解を欲し、だがそれは決して報われないものだから、せめてと互いの身体を求めろ。

寝物語に貴方は言った。だけど私はそう思わない。寝言で私の名を呼ぶ貴方。私の喜ぶ顔を見てほころばせる顔。愛していないと言ふ癖に、貴方は私を理解している。そして私も愛されていると、貴方のことを理解している。

薄紅の理由（前書き）

2010/04/06 執筆

薄紅の理由

桜の下には死体があると言う。その血を吸って薄紅の花を咲かせるのだとも。

そうではないと知ったのは、両手の指で足りるほどの年の頃。

血の涙を流しながら、人形に杭を打つ母。

「お前さえいなければ」

と呪いの言葉を吐くひとりの女。それは真つ白なオオシマザクラの樹だったはずなのに。その花びらは、狂ったように夜空を薄紅に染めていた。

桜が薄紅に見えたのは、私もまた、女の情念の恐ろしさに瞳を薄紅に染めていたからだった。

彼（前書き）

2010/04/10 執筆

彼

つばらな瞳を見たその瞬間、私はそれが彼だと解った。

「この子はもう成犬ですけどいいんですか」

はいと告げたのは、飼育員の隣で彼が小首を傾げたから。それは彼特有の癖。私が彼の望みを察した時に、照れ隠しにいつもそうしていた。そして言うのだ。

「受けるこちらが恥ずかしい」

彼が飼育員の傍らで、おん、と小さく鳴いた。

名を訊く孫に彼の名を告げた。

「おじいちゃん、怒るよ」

此処で聴いているから大丈夫と私は孫に微笑んだ。

足取り(前書き)

2010/04/13 執筆

足取り

学校は、嫌いだ。特に今は、先月よりも。

新しい環境が苦手な僕は、今日も重い足を引きずって歩く。

巧く喋れないんだ。僕はいつでも知らない内に「変わった奴」と言われてしまう。だから変わり目だと僕はいつも独りで歩く。長い長い学校までの距離を、ひとりぼっちでつまらなそうに歩く。

「よっ、おはよ。お前んちってこっちだったんだ」

不意に肩を叩かれた。

「じゃ、今日から一緒に学校へ行こうぜ」

途端、僕の重い足が軽くなった。

ひしゃげた指輪（前書き）

2010/04/21 執筆

ひしゃげた指輪

十数年前には丁度よかつた結婚指輪。今では節くれだつた中年の手そのものになり果てた私の指には入らない。

一縷の望みをかけて、左薬指に通してみる。

「ダメに決まつてる、よね」

指の中ほどで止まつた指輪。よく見ればいびつにひしゃげていた。踏ん切りをつけて、書類を書く。捺印をしてテーブルへ。そしてバッグを肩に担ぎ。

「さよなら、あなた」

玄関の鍵をポストへ落とすと、妙に晴れ晴れとした爽快感が私の中を満たしていた。

きっかけ(前書き)

2010/04/24 執筆

きっかけ

友達に誘われたから何となくという程度だった。先生に何かをし
るとか強制もされなし。母さんなんかはオレ以上に気合が入っちゃ
って、もうスパイクシューズを買って来た。

俺にとってサッカーって、その程度のもんだったのに。

「へえ、ルールも知らないド素人の割には、いいシユートを決め
るじゃん」

小学校の時から憧れていた先輩が、そう言って褒めてくれた。そ
の瞬間、俺の中でただの球蹴り遊びがサッカーという競技に変わっ
た。

自称魔女の語る媚薬レシピ(前書き)

2010/05/01 執筆

自称魔女の語る媚薬レシピ

血の滴る新鮮な肉が、刃物を振り下ろす度に断末魔の悲鳴を上げる。

悪魔の象徴の如き赤い根を刻めばマンドラゴラの奇声とも思える叫びが響く。

ひしゃげ歪んだ実も入れましょう。半死程度に切り刻んで。

最後に悪魔除けの根をみじん切りにして入れる。見えなくらい切り刻む。

仕上げは魔法の粉とリーフと、ほか色々な秘薬。

「はい、カレー。出来たわよ」

「あのさ、解説なしでフツーに作ってくれないか」

食欲が失せると夫に言われた。

五月が、嫌い。(前書き)

2010/05/06 執筆

五月が、嫌い。

ニユースで親達が当たり前のように疲れたと零す。それを羨望で見ると、私のような視聴者もいるなんて思いもしないで。

我が家にも、兜も柏餅も粽もあったのに、肝心のあの子が、いない。

生きていればきっと私を見下ろし、もう子供じゃないよとでも言うのだろう。

今では当たり前のように校門に施錠がされている。その理由も事件も忘れられて、面倒だと零す人もいる。

五月が嫌い。子を意識するから。そしてあの忌まわしい六月も、嫌い。

母の日(前書き)

2010/5/9 執筆

母の日

毎年この日は私にとって、母の醍醐味を味わえる日。初めてのプレゼントは「ママ」と呼んだたどたどしい声。丸と四角で描かれた絵は今でも私の宝物。やがて折り紙の花になり、ひらがなで書かれた「ありがとう」になり、そして今年のプレゼントは、初めて出来た彼女を私に紹介してくれた事。ふたりで選んでくれた贈り物は、フリージア。

「生んでくれてありがとう」

花言葉は、感謝。季節外れのその花に彼らの真心を感じ、涙が零れた。

予想外の特効薬（前書き）

2010/5/10 執筆

予想外の特效薬

頭痛にも腹痛にも薬があるのに。この胸の痛みにはどんな薬も効いてくれない。

「なぜかしら」

物心ついた頃からずっと一緒に過ごして来て、私以上に私を知っているキミに問う。キミはしばらくじっと私を見つめ、突然

「ちよつと目えつぶつてみ」

と言った。不意に唇に宿った予想外の温もり。柔らかな感触が胸の痛みと呼吸困難をすりかえる。途端見開いた互いの瞳。

やっと胸の痛みの理由が判った私を、キミは照れ臭そうに見つめていた。

全部ひっくり返して(前書き)

2010/5/11 執筆

全部ひっくりめて

知っている？ 君は苦しい時ほど楽しかったことしか話さない、
ということ。

「今日さ、田中と帰りにさ」

陽気な声で今日の出来事を語りながら、コーラの入ったグラスを
手に取る。あおるように掲げたそれを、私は君から取り上げた。

「私の前では無理しないで」

全部解っているから。心配掛けたくないんだとか、惨めな自分を
恰好悪いと思っっているとか。

「全部ひっくりめて、大好きだから」

そう言うと、君はやっと私に思いを分けてくれた。

決断は、切断（前書き）

2010/5/12 執筆

決断は、切断

繋ぎとめられるものならよかったのに。時、心、膨らみ続けてとどまることを知らない夢。

長く住んだ此処を去る今を機に、身辺整理を試みた。その時見つけた過去の日記。これを読み返しながらそう思った。日記の中の私は活き活きと輝き、未来への希望に満ちている。綴られる言葉がどれも眩しい。

溜息とともに、表紙を閉じた。

「でももういいの。地に足をつけて先を歩む道を選んだもの」
私は自分にそう言い含め、それらに缺を入れた。

幸せなことを罪だと感じてしまった瞬間（前書き）

2010/5/14 執筆

幸せなことを罪だと感じてしまった瞬間

通夜の岐路を独り歩く。たったひとりの愛娘を亡くした貴女に何の言葉も掛けることが出来なかった。

「ただいま」

だるい右手で玄関の扉を開けると真つ赤な目をした息子が駆け寄って来た。

「お帰り。あかりのお母さん、大丈夫だった？」

私はそう言う息子をしげしげと眺め、幼い頃のように息子を強く抱きしめた。察してくれた息子も無言で私を抱き返す。

息子が生きていることにほっとしている。そんな自分を酷い奴だと思ってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4496k/>

200文字小説集

2010年10月8日15時02分発行